

## 症例報告

# 悪性リンパ腫発症後に静脈血栓塞栓症を併発した一症例

厚生連長岡中央総合病院、薬剤部；薬剤師<sup>1)</sup>、血液内科；血液内科医<sup>2)</sup>

田中 利華<sup>1)</sup>、丸山 和哉<sup>1)</sup>、栗林 友子<sup>1)</sup>、坪井 康介<sup>2)</sup>

背景：深部静脈血栓症は四肢または骨盤等の深部静脈で血液が凝固する病態であり、肺塞栓症の第一の原因である。今回、悪性リンパ腫により静脈血栓塞栓症を併発した症例を経験したので報告する。

症例内容：69歳女性、主訴は労作時息切れ。CTで右鎖骨上窩、右肺門、縦隔、腹腔内にリンパ節腫大を認め、病理検査にて悪性リンパ腫と診断されたため、後日、入院にて化学療法を行うこととなった。入院時には下肢の浮腫が出現しており、肝門部付近のリンパ節腫大も増悪していた。また、下大静脈内および右肺血管内に血栓が認められたことから化学療法の開始を延期し、直ちに循環器内科にてヘパリン投与を開始された。肺塞栓の消失を確認後、血液内科にてR-CHOP療法を開始し、悪性リンパ腫は寛解を得た。

結論：悪性腫瘍は深部静脈血栓症の危険因子であり、治療の副作用として他の循環器疾患を発症することも知られている。薬剤師として合併症の早期発見に繋がるよう患者さんの変化を見逃さないように接する事が大切である。

キーワード：深部静脈血栓症、悪性リンパ腫

## 背 景

深部静脈血栓症とは、主に下肢や骨盤等の深部静脈に血栓を生じ、下肢の腫脹や疼痛、色調変化等をきたす疾患である。また、肺塞栓症とは、深部静脈で発生した血栓が遊離して肺血管を閉塞し、呼吸困難や胸痛、冷汗、失神等を引き起こす致死性の疾患である。肺塞栓症の多くは深部静脈血栓症によって引き起こされ、これら一連の疾患は総称して静脈血栓塞栓症と呼ばれている。今回、悪性リンパ腫と診断された後に静脈血栓塞栓症を併発した症例を経験したので報告する。

## 症 例 内 容

69歳女性。高血圧、頭痛にて近医に通院加療中。20XX-1年12月中旬より労作時息切れを自覚。近医受診しステロイド吸入薬を処方されたが1週間後も症状改善なく、またレントゲンにて右肺門部腫瘍あり、当院呼吸器内科へ紹介となる。後日、CTで右鎖骨上窩、右肺門、縦隔、腹腔内にリンパ節腫大を認め、悪性リンパ腫疑いにて血液内科へコンサルテーションされた。20XX年1月、気管支鏡生検を施行。病理検査にて悪

性リンパ腫と診断され、後日、入院にて化学療法を行うこととなった。入院時には下肢の浮腫が出現しており、D-ダイマー13.4と高値であったことから血栓の存在が示唆された。CTでは、肝門部付近のリンパ節腫大が増悪し、下大静脈内に血栓、右肺血管内にも塞栓が認められた。リンパ節の腫大により下大静脈が圧迫されて血流が悪化し、血栓ができたものと考えられる。直ちに循環器内科へ転科し、酸素吸入およびヘパリン持続点滴を開始された。化学療法は延期となり、それに伴う腫瘍増大を抑えるために、プレドニゾロンの点滴が開始された。

ヘパリンの投与量は初回に10000~15000単位を24時間持続点滴し、その後、APTT値が2倍に延長するよう投与量を調節していくことが推奨されている(1)。入院時のAPTT値は27.4であり、まず、ヘパリンの投与量を15000単位/日で開始したところ、治療開始2日目のAPTT値は50.8と良好な結果が得られた。入院時の労作時息切れは3日目には消失し、下肢浮腫の改善および体重減少が認められた。その後、5日目のAPTT値が70.5と高値となったため、ヘパリンの投与量を11250単位/日に減量したところ、翌日のAPTT値は41.1に低下。再度、13500単位/日まで増量し、APTT値52.6となり、そのまま継続した。一方、D-ダイマーは治療開始5日目には7.7に低下し、新たな血栓形成が抑制されていることが確認された。

治療開始8日目のCTにて肺塞栓の消失が確認されたが、下大静脈内の血栓は右心房まで到達し、原因病変と考えられる悪性リンパ腫の早期治療開始が望ましいと判断された。10日目にはR-CHOP療法を開始し、残存していた浮腫は14日目に消失、16日目にヘパリン持続点滴を終了し、エドキサバン錠の内服が開始された。21日目にはD-ダイマーは陰性化し、22日目に退院となった。その後、順調に化学療法を継続し、20XX年7月に全8コースを完遂した。8月のCTでCRと判定された。

## 考 察

悪性腫瘍は深部静脈血栓症やそれに続発する肺塞栓症の危険因子であると考えられ、さらに抗悪性腫瘍剤の副作用としても他の循環器疾患を引き起こす可能性があることが知られている。今回の症例を通して、日常で患者と接する際に循環器疾患の早期発見につながるように、患者の訴えを傾聴し、患者の変化を見逃さない様に接していくことが大切である。

## 文 献

1. 安藤太三、他. 肺血栓塞栓症および深部静脈血栓症の診断、治療、予防に関するガイドライン (2009年改訂版) URL : <https://www.niph.go.jp/topics/shinbujoumyaku.pdf> (引用アクセス日2018年3月10日)

## 英 文 抄 録

### Case report

A case of venous thromboembolism after the onset of malignant lymphoma

Department of Pharmacy, Nagaoka Chuo General Hospital ; Pharmacist<sup>1)</sup>, Department of Hematology ; Hematologist<sup>2)</sup>  
Rika Tanaka<sup>1)</sup>, Kazuya Maruyama<sup>1)</sup>, Tomoko Kuribayashi<sup>1)</sup>, Kosuke Tsuboi<sup>2)</sup>

**Background :** Deep vein thrombosis is a disorder where blood clots in the deep veins of the limbs or pelvis and is the most common cause of pulmonary embolism. This is a report of a case where malignant lymphoma led to the onset of a venous thromboem-

bolism.

**Details of the case :** The patient was a 69-year-old female with exertional shortness of breath as the primary complaint. CT showed enlargement of the right supraclavicular, right hilar, mediastinal, and peritoneal lymph nodes, and diagnosis of malignant lymphoma was given as the result of pathology. For this reason, the patient was to be hospitalized at a later date for inpatient chemotherapy. Leg edema had appeared by the time of admission, and the enlargement of the portal lymph nodes was exacerbated. Also, the commencement of chemotherapy was postponed after the discovery of thrombi in the inferior vena cava and right pulmonary vessels, and treatment with heparin was commenced immediately by the Department of Cardiology. After resolution of the pulmonary embolism was confirmed, R-CHOP therapy was commenced at the Department of Hematology, leading to the remission of the malignant lymphoma.

**Conclusion :** Malignant tumors are a risk factor for deep vein thrombosis, and other circulatory disorders are known to occur as adverse effects of the treatment. As pharmacists, it is important to avoid missing the changes in the conditions of patients so complications are discovered as early as possible.

**Key words :** Deep vein thrombosis, malignant lymphoma

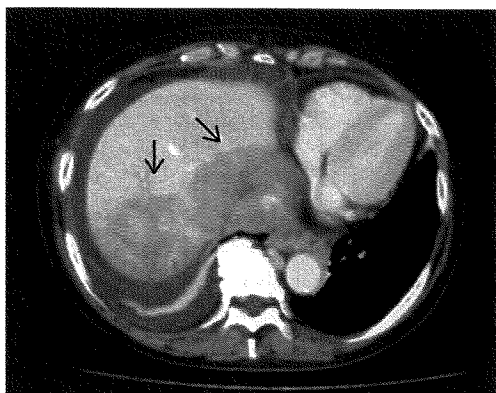


写真1. 化学療法開始前の腹部CT：中央の色が変わっている部分がリンパ腫。左側に肝内浸潤している

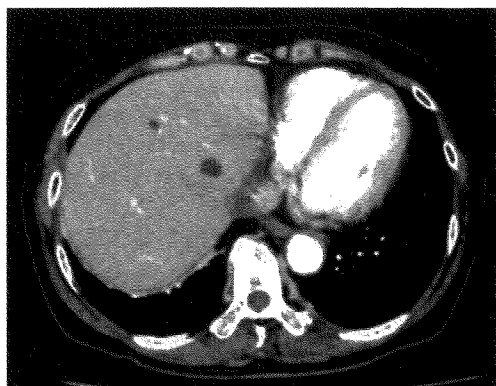


写真2. 化学療法完遂後の腹部CT：リンパ腫が縮小し、肝内浸潤も改善している

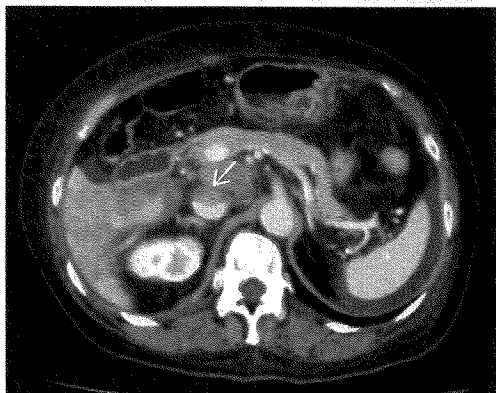


写真3. ヘパリン投与前の腹部CT：下大静脈の上半分に陰影があり、血栓の存在を示している

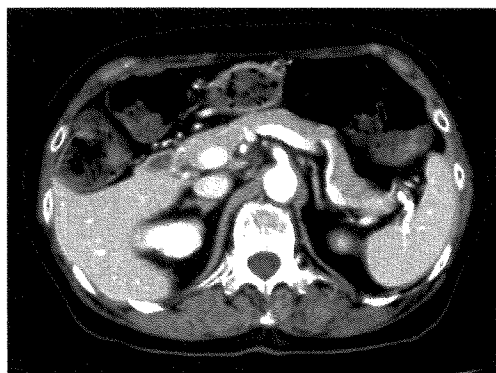


写真4. ヘパリン投与後の腹部CT：下大静脈の陰影がなくなり、血栓の消失が確認できる

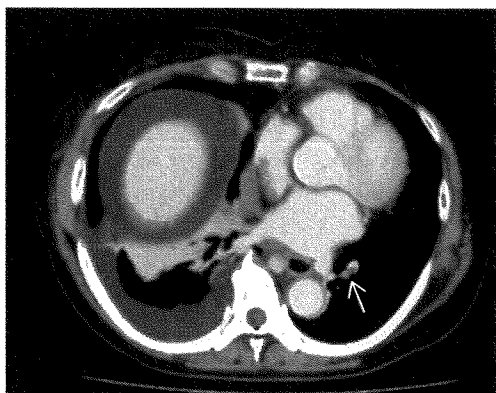


写真5. ヘパリン投与前の胸部CT：肺血管に陰影があり、肺塞栓の存在を示している

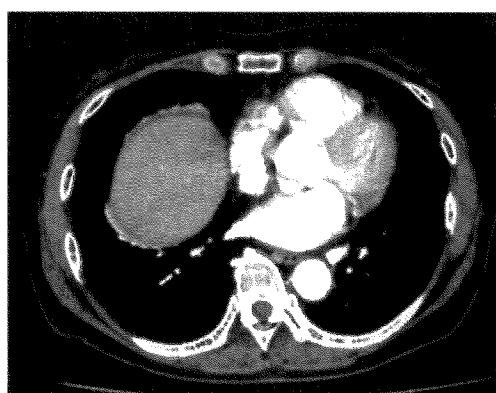


写真6. ヘパリン投与後の胸部CT：肺血管の陰影がなくなり、肺塞栓の消失が確認できる